

漢文資料を活用した世界史探究と古典探究の教科横断的学習 — 「諸子百家の採用を進言する」授業実践を通して —

愛知県立豊橋東高等学校
教諭 服部 良太

1 主題設定の理由

令和4年度から実施されている新学習指導要領では、地理歴史科に歴史総合や世界史探究、国語科には言語文化・古典探究などの科目が新設された。世界史探究では、歴史的な見方を働かせながら、世界の歴史について主題を設定し資料を比較したり関連付けたりして読み解き考察、表現する活動が期待されている。また、古典探究では先人のものの見方、考え方をを用いて自分の考えを深めたり、古典と関係のある資料を調べ成果を発表したりすることが掲げられている。

そこで、中国の古代史をテーマに、漢文資料を題材に世界史探究と古典探究との教科横断的な学習を構想した。

2 研究の目標

目標を踏まえ、目指す生徒像を次のように設定した。

- (1) 漢文資料の読解を用いて、世界史を探究できる。
- (2) 世界史の理解や見方を用いて、中国古典を探究できる

この学習により、漢文資料を用いることで世界史の理解が深まり見方が身に付くこと、さらに、世界史の理解や見方が漢文の読解にも有効であることを生徒に実感させられるのではないかと考えた。また、両科目を関連させることで、科目の中だけで完結する学習のための学習ではなく、現在の学習が様々な学びにつながることを実感させ、主体的に探究したいという意欲を高めることを目指した。

3 授業のねらい

- (1) 単元名 「東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質」

この単元は、学習指導要領では「2 内容」の「B 諸地域の歴史的特質の形成」「(3) 諸地域の歴史的特質」に該当し、中国を中心とする東アジアや中央ユーラシアの古代史について学習する。

- (2) 指導計画

漢文資料を活用するために、春秋・戦国時代の思想である諸子百家をテーマに設定した。世界史探究では、儒家や墨家などの学派や孔子・墨子といった思想家の名前、さらには思想の概要についても学ぶ。また、古典探究でも、多くの教科書で『論語』や『韓非子』といった諸子百家の漢文が掲載されている。

本実践では「諸子百家の採用を進言する」と題し、全3時間で次のような学習課題を提示する(資料1)。全3時間で漢文資料の読解・進言の内容の検討、進言を行う(資料2)。第1時では、概要を説明するとともに生徒を4人グループに分け、儒家・墨家・道家・法家を選択する。各学派に2種類の漢文資料を配布し、思想家の考えを読み取り、国家の統治にどう役立つかをグループ学習で検討する。

第2時では、引き続き漢文資料の読解を行い、その内容を元にして話し合いを行いながら進言内

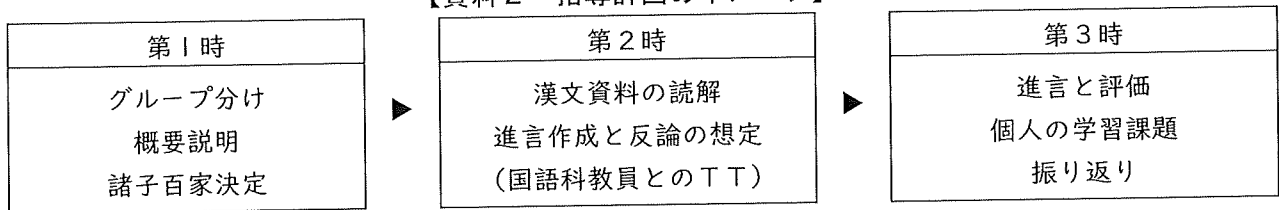
容をまとめる。このときに国語科教員とのティーム・ティーチング（以下、「TT」と表記）を行い、重要な句法の確認や、各グループからの疑問に答える時間を設定した。進言は、次回の提案にむけてロイロノート・スクール（株式会社 LioLo、以下「ロイロノート」と表記）のカードにまとめる。

【資料1 学習課題】

春秋・戦国時代は周王朝の弱体化とともに多数の諸侯が自国の存続のために互いに争う時代であった。こうした情勢を受けて、各国は、自国の存立や理想的国家の建設に向けて思想家を優遇した。思想家たちはみずからの思想を構築し、諸国で採用されるべく自説を説いて回った。彼らは後の時代に「諸子百家」と総称される。

あなたは、春秋・戦国時代の小国に仕えています。自国をまとめ乱世を生き抜いていくために、君主にどの思想家の採用を進言しますか？

【資料2 指導計画のイメージ】



第3時では、君主に向けて実際に進言を行う。また、進言に対して他の思想家のグループから質問・反論の時間を設けた。君主役には第三者の教員を招き、提案に対する評価を行ってもらったこととした。第三者に伝える活動を取り入れることで、思想を分かりやすくまとめ提案する必然性が生まれる。

グループ学習の後は個別学習に戻って「あなたが春秋・戦国時代の君主だとしたら、どの思想家を採用しますか？」という学習課題に取り組む。それぞれの進言を聞いた後で、どの思想が国家の統治に役立つか、利点と欠点を踏まえてまとめる。

(3) 指導上の工夫

授業をデザインする上での工夫は2点ある。1つ目は、漢文資料を読んで思想のどの部分が統治に役立つか思考・判断する場面を設けたことである。さらに、それを君主に進言する必要があるため、表現場面も生まれることになる。

2つ目はグループ学習と個別学習の往還を行う場面を設けたことである。グループで協働的な学習によって問題解決を行った後、個別学習に移る。グループ学習の際に論点が整理されることで、世界史や漢文が苦手な生徒でも取り組みやすくなると考え、学習場面を設計した。

4 授業の実際

第1時では、4人グループに分け進言する学派を決定した。法家・墨家を希望する班が多かったが、第3希望まで記入させ、各学派の数が均等になるように調整した。配布する漢文資料は、分量に差があるため、一部を空欄にする穴埋め形式とし、日本語訳のみに終始しないようにした（別紙資料①）。各学派の概要をまとめた資料をロイロノートで配信したため、漢文資料と概要を見比べながら学習する姿が見られた（写真1）。資料を読解する中で生まれた疑問点は記録しておき、第2時で質問できる場があることを伝えた。

第2時は、国語科教員とのTTを実施した。机間巡視をしながら、漢文読解に必要な句法の解説や、疑問への対応を行った（写真2）。ほとんどの班が第2時の途中で漢文資料の読解を完了させ、進言の作成に移ることができた。漢文資料に基づいて、国家の統治にどう役立つのかを考えるのは難易度が高く、グループで様々な意見を交換しながら思考する様子が見られた。

第3時では君主への進言を行った。今回は世界史を専門とする本校の校長を招き、君主役および助言者を依頼した。各班にはロイロノートのカードに進言の内容をまとめ事前に提出させた（写真3）。

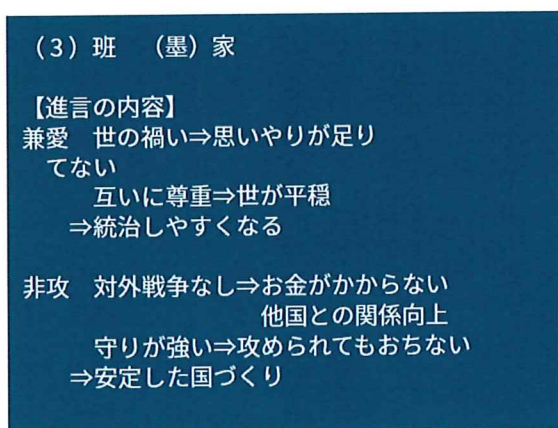


【写真1 グループ学習】



【写真2 国語科教員によるTT】

進言の際には、発表者2人が前に出て君主に進言を行った（写真4）。その際に、カードを黒板にプロジェクターで投影し、他班にも進言内容が分かるようにした。進言を行った後、その内容に関して、別の班から反論および質問に移る。他の学派を提案する他班からは、進言の曖昧な部分や学派の弱点を突く鋭い質問が出たが、想定していた班は臨機応変に対応していた。



【写真3 進言をまとめたカード】



【写真4 進言の様子】

進言の評価は、①論理展開、②対応、③表現の3つの観点から行うことを事前に提示した。①は進言の内容が国家の安定や統治にその思想がいかに役立つかを資料に基づいて論理的に説明しているか、②は反論への対応が的確で無理がないか、③は君主に対する適切な振る舞いが行えているかを判断の基準とした。評価者だけでなく、生徒一人ひとりも他班の進言を聞きながら評価することとした。今回は、「兼愛」・「非攻」を資料に基づいて自分たちの言葉で分かりやすく伝え、対外戦争が減らすことで国家の安定や繁栄に寄与することを説いた墨家のグループが採用された。校長からは、採用に至らなかった班にも優れていた点や改善点をフィードバックしてもらい、グループ学習のまとめとした。

次に個別学習に移り、「あなたが春秋・戦国時代の君主だとしたら、どの思想家を採用しますか？」という学習課題に取り組んだ。また、主体的に学習に取り組む態度を測るために、「一連のグループ学習を振り返りましょう、諸子百家や中国の歴史についてどのようなことを学習していきますか？」という振り返りを実施した。両方ともロイロノートのカードにまとめて提出することとし、家庭学習の課題とした。

5 成果とまとめ

(1) 成果

本実践により、大きく2つの成果が得られた。まずは、生徒の思考・判断・表現の力が向上した

ことである。最後の学習課題では約98%の生徒が、思考・判断・表現の評価でB以上となった（資料3）。同様の課題をグループ学習から個別学習と連続して行うことで、多くの生徒が資料に基づいて諸子百家の思想がどう国家の統治に役立つか表現できた。別途資料②の儒家の例のように、利点だけでなく弱点を踏まえつつ論述しA評価となった者も5割程度であった。

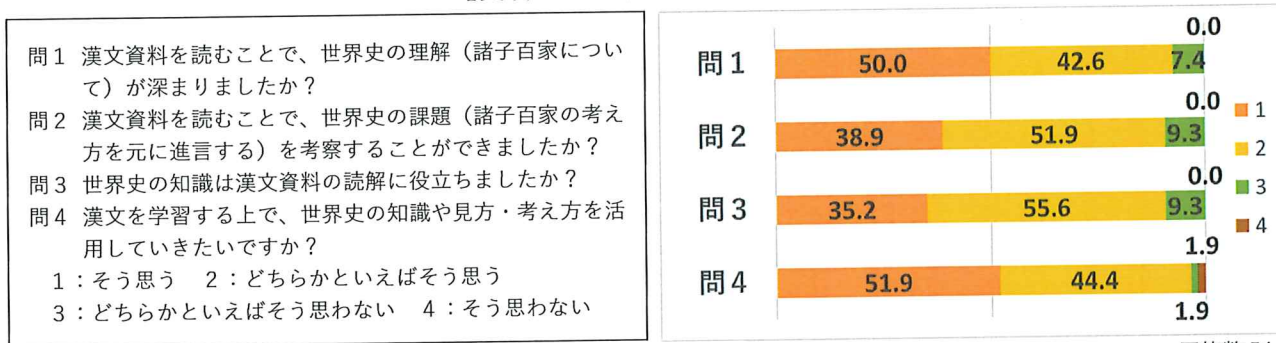
【資料3 学習課題の観点別評価の内訳】



回答数 51 (上) 48 (下)

次に、世界史と漢文の教科横断を行うことで、生徒の主体性が発揮されたことについて述べる。アンケートでは、漢文資料を読むことが世界史の理解や課題解決につながったと考えている生徒が9割を超えた。（資料5）また、反対に、世界史の知識も漢文の読解に役立っていると感じていることが分かった。観点別評価でも主体的に学習に取り組む態度は8割以上がA評価となり、主体的に追究する姿勢がみられた。世界史と漢文の知識や見方が相互に関連し、双方の学習効果を高めていったといえる。振り返りの記述からは、生徒は漢文資料の読み取りに難しさを感じつつも、そのおもしろさに気づいたり、今後の学習への意識づけにつながっていったりしていることが読み取れる（別紙資料③）。以上のことから、目指す生徒像に掲げた、漢文資料から世界史を探究し、世界史の知識や見方を用いて中国古典を探究する生徒を育成できたと考える。

【資料5 生徒アンケート】



回答数 54

(2) まとめ

教科書に掲載されている身近な資料を用いて探究活動を行うことで、生徒の能力を伸ばし、学習意欲を喚起することができた。世界史探究と古典探究の相性はよく、諸子百家以外にも『史記』などの歴史や『長恨歌』などの漢詩も教材になりうる。さらなる地理歴史科と国語科の教科横断的な学習の可能性を探っていきたい。

6 参考文献

- ・『諸子百家』（湯浅邦弘、中央公論新社、2009年）
- ・『中国哲学史』（中島隆博、中央公論新社、2022年）
- ・『古典探究 漢文編』（桐原書店、2022年）
- ・『精選古典探究 漢文編』（東京書籍、2022年）

【別途資料① 漢文資料（法家）】

韓非子「侵官之害」の漢文
『精選古典探究 漢文編』
p. 170～171
(東京書籍、2022年)

法家②

昔、韓の昭侯が酔ってうたた寝をした。昭侯の冠を管理する役人が、君主の寒そうにしている様子を見て、衣服を君主の身体にかけた。やがて昭侯はうたた寝から目が覚めて、「衣がかけられていることを」喜び、側近に尋ねて言うことには、「誰が衣服をかけてくれたのか。」と。側近がお答えして言った、「冠を管理する役人です。」と。昭侯はそこで、衣服を管理する役人と、冠を管理する役人とを、あわせて処罰した。衣服を管理する役人を罰したのは、自分の担当する仕事（衣服の管理）を怠ったと考えたからである。冠を管理する役人を処罰したのは、自分の職務（冠の管理）以外のことをしたと考えたからである。（昭侯は、自分自身が）寒いのを嫌だと思わなかったわけでは無い。しかし、他人の職務を侵犯することの弊害は、寒さによる弊害よりもひどいことだと考えたからである。

このようなわけで、賢明な君主が臣下を召し抱えておく場合には、臣下は自分の職務を越えて功績を上げることができないし、意見を述べた以上はそのとおりに実績を上げなければならぬ。自分の職務を越えて出すぎたことをすれば殺されるし、述べた意見と実績とが一致しなければ処罰されるのである。

※ 赤字部分が空欄とした箇所

【別途資料② 学習課題】

僕は最初、現代に近く、説明のしやすい法家に魅力を感じていましたが、班の発表で儒家の説明を資料を見たりして考えるうちに儒家がいいと思うようになったので、儒家を選びます。

儒家は、良い点として孟子の四端より、人が四肢と同じように持っている思いやりの心や年長者を敬う心を中心とした考え方なので、採用して国に広く普及させれば家庭や社会の常識となり、人々に道徳心がめばえ、公共事業や仕事で年長者が責任者として決まりやすく、その長年の経験から国のどの地方でも全体的に安定した効果や成果が期待できる点と、上下関係の考え方がかたまり、皇帝である自分の権威をより確かにできる点、なにより、「思いやりの政治」を意識することで国の繁栄と反乱の減少が望める点です。

しかし一方で弱点として、人の良心という不確定で目に見えないものに政治の重きを置いている点、年功序列で能力のある若者などを取り立てることができない点などがあります。

二つ目に対しては、この時代では本当に能力がある人間を適切に役職につけることが難しく、高い役職につくために競争や賄賂などの問題が起きたり、長く国に貢献してくれている人間を評価できなくなるなど争いや悪化すれば反乱に繋がりにくい状態になってしまう可能性があり、儒家の考え方が良いとかがえられず、一つ目に関して僕は儒家の最大の弱点だと考えていて、いくらこちらが思いやりの心をもってしても自分勝手な純粋な悪人には効果がないです。だから儒家の荀子の考え方で礼の習得、実践で性の矯正を説いた性悪説、思いやりの王道政治を最高としつつも、武力政治を次善とする考え方から、場合場合によってうまく統治するつもりです。

【別途資料③ 生徒の振り返り】

教科書の説明的な文書だけでなく、漢文から孟子の考えを学ぶことができ難しかったですが、その時代の考え方というのがより実感できて楽しかったです。儒家は仁を重んじるという理解しなかったですが、今回の学習を通してどのような考え方で仁を大切にしたいのか、仁以外の孝・礼はどういう意味なのか、など学ぶことができました。発表では、儒家以外の法家と墨家と道家の良さも知ることができました。儒家以外なんて考えてなかったのですが他のグループの説明を聞き、特に法家も良いと感じました。法の支配は現代でも成立しているし、法に対する反乱が起こることはあると思いますが、王に信頼さえあれば国民をまとめることができる良い思想だと感じました。今後は戦いを避け思いやりの精神を大切に儒家が武器による争いのある時代にどのように成立したのか、現代でもさらに諸子百家の考えを取り入れることができるのではないかと、ということをお話していきたいです。